

## 同窓会の皆様へ 活躍する後輩たち

和洋国府台女子中学高等学校 校長・高校同窓会名誉会長 太田 陽太郎



東日本大震災から早や一年余、震災後も自然は人の営みを呑み込むように、日本海側に大豪雪をもたらしています。あらためて日本の海や山・自然を見つめ直し、共に歩む姿勢が求められているように思います。

この一年、生徒の活躍はすばらしいものです。中三生が少年の主張県大会で優勝し県知事賞をいただきました。市内の英語スピーチコンテストでは高校生が初めて四部門全てで一位を獲得、県では惜しくも二位。

部活動では高校のダンス部が11月の全国大会で準優勝。卓球部は中学高校ともに全国へ、とりわけ高校は全国大会30回出場です。水泳部も中学が全国大会。陸上部は市内駅伝大会で中学は一位、高校は一般女子で二位、それぞれの部が「夢は日本一」と頑張っています。

高校三年生の進学状況も立派です。自分を生かし、自分らしさが生きる道をしっかり見極めて進路の選択をしています。大学受験の場合、どういう学部での勉強が自分に良いのか、その学びにふさわしい大学はどこなのか、と考えて大学を選び、受験方法を選んでいます。センター試験受験者も210名と55%の生徒が受けています。顕著なのは昨年今年と30名を越える生徒が看護や薬学系大学に進んでいることです。

自立した女性として、礼を弁え、人々の信頼を受けて活躍する後輩がしっかり育っています。

## 縦と横、同窓生の絆

高校同窓会会長 山田 眞理子



中学・高校時代の友達、一生の友達である。多感な少女時代を共に笑い、泣き、共に悩んだことが、互いに得難い存在として位置づけているのである。私の場合、もう50年以上のお付き合いだが、未だに年に数回の旅行や会食が続いている。これは、同期の横のつながりだが、同窓会という、先輩や後輩の縦のつながりもなおざりにできない。外国や地方を旅すると、同じ学校の卒業生というだけで世話になったという話もよくあることである。

昭和55年(1980)、田村謙治校長先生(当時)の肝いりでスタートした高校同窓会は、今年32年を数える。この6月、第17回の総会・懇親会を開催する予定であるが、総会後の懇親会には、毎回多くの恩師にご臨席いただき、和やかな祝宴が展開されることは、うれしい限りである。

私は、巣鴨で発行していたタウン誌を昨年12月号(通巻205号)で最終号とした。狭い取材範囲でほぼ特集テーマをやり尽くしたこと、自分が古稀を迎えたことなどが主な理由だ。小さな会社故、自分で定年を決めなくては、いつまで経っても卒業できないからだ。今後は、世界遺産の旅もさることながら、小学校から中学、高校、大学まで全国に散らばる友達を訪ねてみたいと思っている。

高校同窓会は、会員の皆様にとって、旧交を温める場として、新たな出会いを見つける場として、お役に立ちたいと思っている。同時に同窓生の絆を生かし、母校のさらなる発展にいささかなりとも寄与できれば幸いである。

### 杉山和子(11回生)さん、油絵を寄贈

11回生の杉山さんは、このほど市川市展で「市川市議会議長賞」の「春光」を学校に寄贈した。「どこに飾らせてもらいましょうか」と太田校長先生。これまでも杉山さんは3点ほど寄贈している。

### 東日本大震災募金、有難うございました

昨年の大震災以来、同窓会では募金箱を設け、協力を呼びかけている。学園祭の同窓会談話室での募金を区切り、精算、総額33,100円。これは大震災津波支援金としてあしなが育英会に寄託した。



杉山和子(左)さんと太田校長先生



談話室で募金を呼びかける同窓会役員